

訪問介護実習に向けての効果的教育指導のあり方 —実習評価を通しての学び—

A Method of Effective Education in Home—Help Service Evaluation as the Result of Practical training

吉田 紀子 石黒 康子 井上 理絵
YOSHIDA Noriko, ISHIKURO Yasuko and INOUE Rie

1 はじめに

筆者らは、訪問介護実習に向けて効果的な教育方法を開発していくことを目的に調査研究を試みてきた。

まず第一報では、家事援助業務の現状と課題について実習先の事業所での調査を行い¹⁾、その結果を踏まえて第二報では、家事援助の経験度、実習に際しての不安要素等²⁾、第三報では、学生の日常生活の実態として生活時間調査から「家事」の実状を把握した³⁾。

今回は、実習終了後の評価について、実習到達目標・実習態度の評価を、実習先の事業所評価及び学生の自己評価をもとに分析を行い、到達の現状を明確にして、訪問介護実習での学びを考察する。さらに、今後の家政学教育のみならず、日常的生活の指針等に反映することを目的とした。

II 訪問介護実習の目的、目標および評価

1. 実習目的

訪問介護実習の実習目的は「学内及び施設介護実習で学んだ専門知識・技術を訪問介護実習等の場で活用し、高齢者・障害者等の介護と日

常生活援助を行う上で必要な能力を養う」ことである。

2. 実習目標

実習目的達成のためには一般目標と具体的行動目標がある。一般目標5項目を以下に示した。

- (1) 在宅福祉サービス機関の目的及び機能などについて理解できる
- (2) 訪問介護事業の概要を理解できる。
- (3) 利用者並びに家族が求めている介護ニーズの理解ができる。
- (4) 利用者の介護ニーズに応じた日常生活援助の方法について考え、援助できる
- (5) 在宅福祉サービスの活動の実際を通し、福祉・保健・医療制度及び連携の方法について学ぶ。

3. 実習評価

実習の評価は、本学における実習の事前学習・事後学習の評価及び実習事業所の評価をもとに総合的に評価を行う。

事業所の評価は、実習終了後各評価項目に対して、それぞれ学生の達成度はどうであったかを実習指導者が評価する。また、学生自身も自己評価を行い、学びの振り返り資料としてい

る。

実習評価は(1)実習到達目標 (2)実習態度から評価を行う。その内容を以下に示した。

(1) 実習到達目標

- 1) 在宅福祉サービス機関の目的及び機能などについて理解できる。
- 2) ホームヘルプサービス事業等の概要を理解できる。
- 3) 利用者並びに家族が求めている介護ニーズが理解できる。(介護ニーズの理解)
- 4) 利用者の介護ニーズに応じた日常生活援助の方法について考え、援助ができる。(介護ニーズの援助)
- 5) 在宅福祉サービス介護活動の実際を通し、福祉・保健・医療制度及び連携の方法について学ぶ
- 6) 実施した事実を実習記録に記録でき、提出物の期限を守ることができる。
なお今回は、家政学見地から3)、4)のみを調査項目とした

(2) 実習態度

- 1) 挨拶・応答が適切である。(挨拶・対応)
- 2) 服装・身だしなみが適切である。(服装・身だしなみ)
- 3) よい人間関係を保ち、協力的に行動できる。(人間関係)
- 4) 指導を真面目に受けとめ、責任ある行動ができる。(責任ある行動)
- 5) 意欲的・計画的に実習することができる。(意欲的・計画的実習)
- 6) 専門職として利用者の人権や秘密を守ることができる。(人権尊重)

なお、以後の到達目標、実習態度の項目については()表示とする。

実習到達目標及び実習態度の評価基準

は、A (よくできる) 100~80 (6点) B (まあまあできる) 79~70 (5点) C (あまりできない) 69~60 (3点) D (できない) 59点以下 (1点) であり、同様の項目について学生自身も自己評価を行い、実習評価表を提出する仕組みになっている。

III 研究方法

1. 調査対象

訪問介護実習終了後の本学福祉学科2年生97名の中、記入不備1名を除く96名を対象とした。

訪問介護実習の期間

1班：平成18年5月22~26日、2班：平成18年5月29~6月2日のいずれか5日間

2. 調査期間

訪問介護実習終了後 平成18年6月中旬~7月

3. 調査方法

事業所指導者による実習評価と自己評価の評価表を比較分析した。検定はSPSS 14.0ソフトにより行った。

表1 調査対象学生の属性

性別	男性	13名	13.5%
	女性	83名	86.5%
年齢	10代	34名	(平均年齢 19.7歳)
	20代	61名	
	30代以上	1名	
通学方法	自宅通学	88名	91.7%
	アパート通学	8名	8.3%
有資格 内訳	訪問介護員	14名	14.6%
	3級	(8)	
	2級	(6)	
	福祉用具専門相談員	5名	5.2%
	福祉住環境コーディネーター	11名	11.5%
	3級	(9)	
2級	(2)		
	教諭第一種免許	1名	1%

表2 訪問介護実習における指導者評価と学生の自己評価

評価内容	評価項目	指導者評価		自己評価		有意確率
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
実習到達目標	1. 利用者並びに家族が求めている介護ニーズが理解できる	5.11	0.596	4.83	0.790	*
	2. 利用者の介護ニーズに応じた日常生活援助の方法について考え援助ができる	4.88	0.997	4.59	1.032	**
実習態度	3. 挨拶・応答が適切である	5.61	0.701	5.28	0.804	*
	4. 服装・身だしなみが適切である	5.71	0.579	5.57	0.661	
	5. よい人間関係を保ち、協力的に行動できる	5.51	0.665	5.16	0.759	*
	6. 指導を真面目に受け止め、責任ある行動ができる	5.56	0.723	5.47	0.561	
	7. 意欲的・計画的に実習することができる	5.19	0.850	5.03	0.814	
	8. 専門職として利用者の人権や秘密を守ることができる	5.67	0.474	5.91	0.293	*
計		43.24	5.585	41.84	5.714	*
平均		5.41		5.23		

指導者、学生間の有意差は t 検定による * $P < 0.01$ ** $P < 0.05$

IV 結果及び考察

1. 調査対象学生の属性

調査対象学生の属性を表1に示した。表1より、性別は96名中女性が83名で86.5%を占め、平均年齢は、学卒者・社会人入学を含め19.7歳であった。通学方法では、ほとんどが県内出身者のため自宅通学91.7%であった。

有資格については、訪問介護員は高校時代に、福祉用具専門相談員・福祉住環境コーディネーターは本学1・2年次に取得した資格である。

2. 実習評価

(1) 指導者評価と学生の自己評価

訪問介護実習における指導者と学生の自己評価を表2に示した。評価の平均は、指導者評価が5.41に対して、自己評価は5.23と低く、学生自身が実習を謙虚に受け止めた結果か、あるいは、学生が十分に実力を発揮できなかった結果と推測される。

指導者での評価が最も高かったのは項目4、「身だしなみが適切である」で5.71であった。また、項目2を除く他の項目においては5（まあまあよい）以上であった。しかし、項目2「利用者の介護ニーズに応じた日常生活援助の方法について考え援助ができる」では4.88と8項目の中では最低となった。

学生の自己評価では、最も評価が高かったのは、項目8「専門職として利用者の人権や秘密を守ることができる」で5.91であり、他の項目3. 4. 5. 6. 7においても評価は5以上であった。しかし、項目1「利用者並びに家族が求めている介護ニーズが理解できる」と、指導者評価同様項目2は、4.83、4.59と低く8項目中2項目が5に達しなかった。項目1. 3. 5. 8においては $P < 0.01$ で、項目2は $P < 0.05$ で有意差がみられた。

次いで、指導者と学生の項目別評価割合を表3・表4に示した。

指導者評価では全項目についてA、Bの「よくできる」「まあまあできる」を合わせて90%以上の評価を得たものは8項目中、7項目あげられた。学生についても、同様にみると、90%以上の評価を得たものが8項目中、6項目あげられた。項目8「専門職として利用者の人権や秘密を守ることができる」は指導者、学生とも100%であった。

(2) 実習到達目標

実習到達目標には、項目1) 2) がある。指導者と学生の評価を比較検討し、以下に示した。

表3 項目別による指導者評価割合

(単位%)

評価項目	評価基準	A	B	C	D	合計
		よくできる	まあまあできる	あまりできない	できない	
1. 利用者並びに家族が求めている介護ニーズが理解できる		20	76	4	0	100
2. 利用者の介護ニーズに応じた日常生活援助の方法について考え、援助ができる		25	56	19	0	100
3. 挨拶・対応が適切である		70	26	4	0	100
4. 服装・身だしなみが適切である		75	23	2	0	100
5. よい人間関係を保ち、協力的に行動できる		57	40	3	0	100
6. 指導を真面目に受け止め、責任ある行動ができる		63	35	1	1	100
7. 意欲的・計画的に実行することができる		38	53	9	0	100
8. 専門職として利用者の人権や秘密を守ることができる		67	33	0	0	100

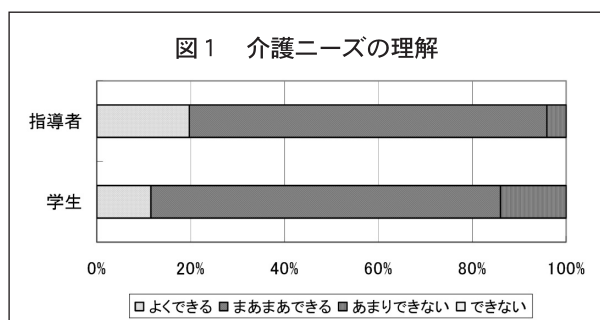
表4 項目別による自己評価割合

(単位%)

評価項目	評価基準	A	B	C	D	合計
		よくできる	まあまあできる	あまりできない	できない	
1. 利用者並びに家族が求めている介護ニーズが理解できる		10	76	14	0	100
2. 利用者の介護ニーズに応じた日常生活援助の方法について考え、援助ができる		14	59	27	0	100
3. 挨拶・対応が適切である		43	50	7	0	100
4. 服装・身だしなみが適切である		64	33	3	0	100
5. よい人間関係を保ち、協力的に行動できる		30	63	7	0	100
6. 指導を真面目に受け止め、責任ある行動ができる		49	50	1	0	100
7. 意欲的・計画的に実行することができる		24	66	10	0	100
8. 専門職として利用者の人権や秘密を守ることができる		91	9	0	0	100

1) 介護ニーズの理解

「利用者並びに家族が求めている介護ニーズの理解ができる」について指導者と学生の評価を図1に示した。



この項目は、2番目に評価が低い項目である。指導者の評価は、「よくできる」、「まあまあできる」を合わせると96%は理解できているが、残り4%は、あまり介護ニーズの理解ができなかったと評価している。学生の自己評価は、86%は理解できるが、14%は「あまりでき

ない」と評価していた。

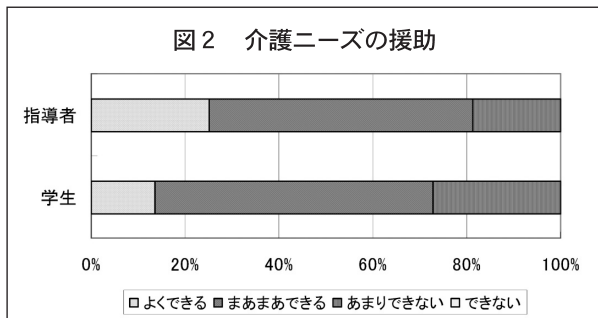
この項目について手引書では、行動目標 ①家族形態や利用者と家族との関係について知る。②家族への援助の方法を知る。③自立支援の具体的な内容について知る、と掲げられている。利用者に対しての十分な事前学習が行われていないと、訪問時に短時間で利用者のニーズを理解することは大変困難であると推測される。

2) 介護ニーズの理解

「利用者の介護ニーズに応じた日常生活援助の方法について考え、援助ができる」の項目について、指導者と学生の評価を図2に示した。

この項目は、8項目中で指導者、学生ともに最も低い評価であった。「あまりできていない」が指導者19%、学生27%であった。つまり、指導者で約2割、学生で約3割近くが利用者の介護ニーズに応じた日常生活援助の方法に

ついて考えると共に援助もあまりできなかった、と評価している。



手引書による行動目標は、①利用者の障害と住環境に応じた家事援助ができる。②相談・助言の実際を理解する。③利用者の障害に応じたコミュニケーションができる、と掲げられている。

前記の項目で利用者理解ができなければ、この項目も評価は低くなるのは当然といえよう。学生の記述には「利用者のファイルを見るだけでは何も分からないので、ヘルパーさんやケアマネジャーに聞けばよかった」「施設での実習と異なり利用者一人ひとりの違いや、ライフスタイルなどに合わせての援助が必要となり、難しいと思った」「もっと意欲的、積極的になればよかった」などの反省点が記されている。

評価が低かった原因として ①初めての訪問先では十分なコミュニケーションがとれない。②限られた時間内での利用者の状況判断は、生活経験の乏しい学生には困難を伴う。③情報量の不足などが考えられる。

(3)実習態度

実習態度には、項目3) 4) 5) 6) 7) 8) の6項目がある。指導者と学生の評価を比較検討し、以下に示した。

1) 挨拶・応答

「挨拶・対応が適切である」の項目について

指導者と学生の評価を図3に示した。

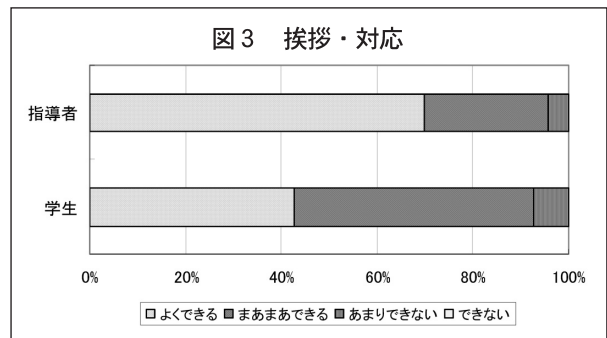


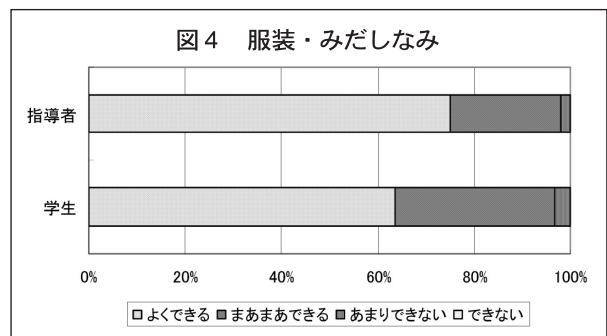
図3より「よくできる」は指導者70%、「まあまあできる」は26%で96%はできると評価されている。学生は「よくできる」43%であり「まあまあできる」が50%であった。「あまりできない」は指導者4.2%、学生7.3%であった。

学生は、挨拶はできるが、利用者に対しての適切な応答ができていないとの判断による結果と思われる。在宅での利用者の生活状況の中で瞬時に利用者に対しての適切な対応は、困難であったと思われる。学生の記述には「声かけをすることができず戸惑った」という内容が多く見られた。

2) 服装・みだしなみ

「服装・身だしなみが適切である」の項目について指導者と学生の評価を図4に示した。

図4より「よくできる」は指導者75%、「まあまあできる」23%で98%はできると評価している。指導者の評価では、最も高い項目である。学生評価は「よくできる」64%で、「まあまあ



きる」33%で97%はできると評価している。本学では服装に関してはケアジャケット・ポロシャツ（襟のあるもの）・実習用ズボンを着用することに決められている。想像以上に学生評価が低い原因は、施設実習の実習服と異なり学生への自己決定による自由性が不安要素へと影響したように推測される。

3) 人間関係

「よい人間関係を保ち、協力的に行動ができる」の項目について指導者と学生の評価を図5に示した。

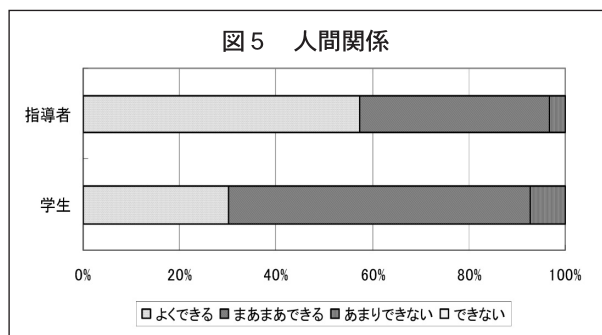


図5より「よくできる」は指導者57%、「まあまあできる」40%で97%はできると評価している。学生は「よくできる」30%であり、「まあまあできる」が63%で93%はできるであった。

学生の記述によると「利用者とも積極的にコミュニケーションがとれ、楽しい実習でした」「利用者の方と多くふれあい、様々な教をいただき、充実した実習になった」など、よい人間関係ができていた様子が記されていた。その反面、「日頃より家事を行っておけばよかった」、「料理のレパートリーを増やしておけばよかった」など反省点も記されている。利用者の状況を判断して協力的に行動するためには生活経験不足といわざるを得ない。それらの反省が学生の自己評価に現れていると考えられる。

4) 責任ある行動

「指導を真面目に受けとめ、責任ある行動が

できる」の項目について指導者と学生の評価を図6に示した。

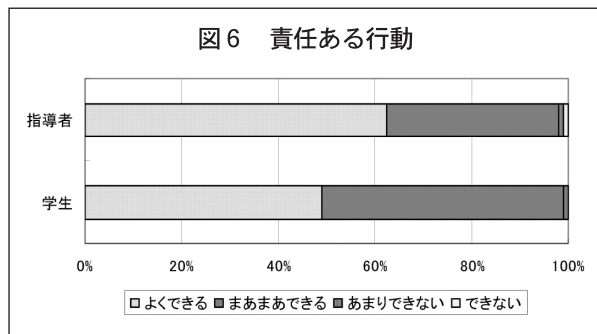
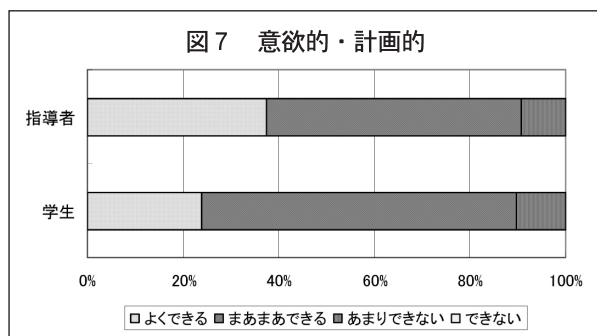


図6より「よくできる」は指導者63%、「まあまあできる」35%で98%はできると評価している。学生は「よくできる」49%であり、「まあまあできる」が50%で99%はできると評価していた。この項目に関しては、指導者評価では4位、学生評価では3位により評価である。このことは、学生は自分なりに真面目に取り組んだ結果の現われと思われる。残念ながらこの項目で評価D「できない」を受けた学生がいた。理由は遅刻によるもので、そのことに関して本人が十分な対応をとらなかったためである。指導者の判断は当然といえよう。養成者側にとっても日頃からの指導に留意すべきであった。

5) 意欲的・計画的実習

「意欲的・計画的に実習することができる」の項目について指導者と学生の評価を図7に示した。

図7より「よくできる」は指導者38%、「まあまあできる」53%で91%はできると評価して



いる。学生は「よくできる」24%であり、「まあまあできる」が66%で90%はできていた。

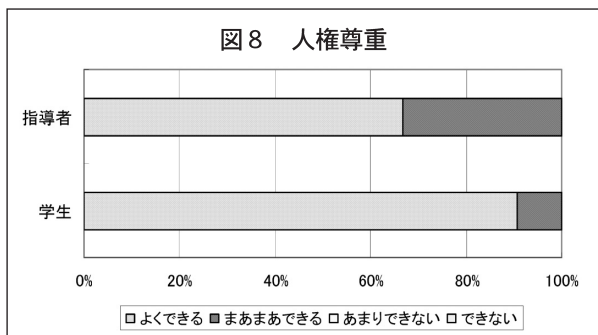
しかし、「あまりできない」が指導者・学生共に10%も見られた。指導者評価、学生評価ともに全体の6位と低かった。

学生の記述には「一日一日前進する気持ちで、計画的に実習に臨むことができた」「積極的に関わることにより、利用者が何を考えているのか、伝えたいのか理解することができた」など学生のひた向きな様子を推し量ることができる。しかし「積極的に行動できなかった」「積極的に話しかければよかった」などの反省的記述も見られた。

6) 人権尊重

「専門職として利用者の人権や秘密を守ることができる」の項目について指導者と学生の評価を図8に示した。

図8より「よくできる」は指導者67%、「まあまあできる」43%で95%はできると評価している。学生は「よくできる」91%で「まあまあ



できる」は9%であった。唯一この項目のみが「あまりできなかった」は指導者・学生共に0%であった。

また、指導者の評価より高かったのもこの項目のみで、学生評価では1位、指導者評価では2位の高い評価であった。学生にとっては、日頃よりあらゆる機会での利用者の人権や・秘密守秘の大切さを伝えており、また、近年個人情報公開に配慮されていることなどによるものと思われる。介護福祉士倫理綱領の3にも記されている(プライバシーの保護)。記述には「改めて人権に関することや、秘密は口外してはいけないと強く思った」などが記されている。

(3) 性別などによる評価

男子学生13名と女子学生83名について指導者評価と学生の自己評価を比較したものを表5に示した。指導者評価では、すべての項目において男子学生の方が評価は高かった。このことは、一般的には家事全般にわたり男子学生は不得手とされているが、結果は異なっていた。

自己評価では項目4の「服装・みだしなみが適切である」は唯一女子学生が評価は高かった。また、項目6「専門職として利用者の人権や秘密を守ることができる」は評価は同じであった。この2項目以外は男子学生の評価が高かった。

(4) 訪問回数と評価

訪問回数と実習評価についての調査では、訪

表5 男子学生と女子学生の実習評価

(男子学生 n=18 女子学生 n=83)

実習到達目標	評価項目	指導者評価			自己評価		
		男子学生	女子学生	平均	男子学生	女子学生	平均
実習到達目標	1. 利用者並びに家族が求めている介護ニーズが理解できる	5.2	5.1	5.1	5.0	4.8	4.8
	2. 利用者の介護ニーズに応じた日常生活援助の方法について考え援助ができる	5.2	4.8	4.9	5.1	4.5	4.6
実習態度	3. 挨拶・応答が適切である	5.9	5.6	5.6	5.4	5.3	5.3
	4. 服装・身だしなみが適切である	5.8	5.7	5.7	5.5	5.6	5.6
	5. よい人間関係を保ち、協力的に行動できる	5.8	5.5	5.5	5.5	5.1	5.2
	6. 指導を真面目に受け止め、責任ある行動ができる	5.7	5.5	5.6	5.6	5.4	5.5
	7. 意欲的・計画的に実習することができる	5.5	5.1	5.2	5.2	5.0	5.0
	8. 専門職として利用者の人権や秘密を守ることができる	5.8	5.7	5.7	5.9	5.9	5.9

問回数は多いほうが評価が低い傾向にあった。

今回の学生の一人当たりの訪問回数は5日間で最高29件、最低3件であった。5日間で平均14.5回、一日平均約3回であった。このことより、学生にとって初めての訪問で実習が終了しているケースでは、家族とのコミュニケーションを図る機会が少ないため、利用者の介護ニーズの理解までに至らなかった学生が多かったと考えられる。しかし、評価はその逆で、訪問回数が多い方が評価は低かった。このことは特に自己評価において現れている。

訪問回数が多いことにより、より自分を客観的に評価すると考えられる。

V まとめ

訪問介護実習終了後の評価を通しての学生の学び調査では以下の結果を得た。

- 1 評価内容8項目における全体の評価項目の平均は、指導者評価は5.41学生の自己評価5.23と学生の方が低く評価していた。
- 2 指導者評価で最も評価が高かったのは、項目4「服装・身だしなみが適切である」で5.71、最も低かったのが項目2「利用者の介護ニーズに応じた日常生活援助の方法について考え援助ができる」4.88であった。自己評価で最も高かったのは、5.91の項目8「専門職として利用者の人権や秘密を守ることができる」、最も低かったのが指導者評価と同様、4.59の項目2「利用者の介護ニーズに応じた日常生活援助の方法について考え援助ができる」であった。
- 3 指導者評価で「よくできる」「まあまあできる」の評価を合わせると、8項目中、7項目が全体の90%を占めた。学生の自己評価では、90%以上が5項目であった。

- 4 実習到達目標の評価は実習態度評価に比べ評価が低く、十分な事前学習が必要であった。

学生の学びを通して、介護ニーズの理解不足や援助能力の不足を再確認した。信頼関係を深め、利用者の隠れたニーズや隠された力を引き出す能力が必要である。

しかし、私達の調査ではヘルパー歴10年でも利用者の意向に添えない事例や受け入れてもらえない報告がある。今後も学生の生活経験不足を補うカリキュラムや日常生活支援の幅広さに対応できる専門性・人間性を高めていくことに努めたい。

参考文献

- 1) 吉田紀子 石黒康子他 居宅介護における家事援助業務の現状について 富山短期大学紀要第37巻 2002
- 2) 吉田紀子 石黒康子他 訪問介護実習に向けての効果的教育指導のあり方—学生の実態調査より— 富山短期大学紀要第38巻 2003
- 3) 吉田紀子 石黒康子他 訪問介護実習に向けての効果的教育指導のあり方—学生の生活時間調査より— 富山短期大学紀要第40巻 2005
- 4) 室 淳子他 SPSSでやさしく学ぶ統計解析 2005 東京図書